

2日間の参加者1万人以上！ おきなわ技能フェスティバル ものづくりフェスタ

10月13日（土）・14日（日）の2日間にわたり、那覇市で「おきなわ技能フェスティバル ものづくりフェスタ」（以下、フェスタ）が開催された。この催しは厚生労働省委託事業「平成30年度若年技能者人材育成支援等事業」の地域における技能振興の一環で、前身の「沖縄県職業能力開発促進展」から数えると今年で39回目。次代を担う若者らに、技能士が持つ技の素晴らしさを実感してもらうことや、技能継承の重要性について考えてもらうことを目的としている。



子どもたちと技能との出会いを

36団体が支える一大イベント

会場となった「波の上みそら公園」（第1会場）と「那覇地域職業訓練センター」（第2会場）は、県内各地から訪れた親子連れをはじめとする1万人以上（2日間の延べ人数）の来場者で賑わった。主催者



である沖縄県職業能力開発協会の仲本豊会長は「今年の参加団体は技能士会や職業能力開

発施設など合計36団体。各団体の皆さんが熱心に協力してくださるおかげで、全体として年々内容が充実してきています。来場者の中から技能の道に進んでくれる子が現れたら何より嬉しいですし、親御さんたちにも技能の素晴らしさを再発見していただきたいですね」と語る。



「琉球赤瓦」や「沖縄そば」など ものづくり体験は地域色も豊か

多彩なものづくり体験が並ぶ中でも、特に強い地域性が感じられたのは沖縄県琉球赤瓦漆喰施工協同組合が提供する「赤瓦の絵付け・漆喰シーサーづくり」だ。シーサーには「石像」「焼きもの」もあるが、漆喰シーサーはかつて、屋根を葺いた職人の棟梁が施主さんへのお礼の印として屋根の上に設置したものだ。漆喰と瓦のかけらだけを用いて即興で作るので、世界に二つとない、オリジナルのシーサーと



なる。雨風に晒されても壊れない耐久性も必要なので、製造には高い技術が求められたという。参加した子どもたちは、まず瓦で胴体と下顎・上顎の“骨組み”を作る。それらを漆喰で接着、肉付けし、さらに小さな瓦のかけらで耳や尻尾を作る。最後に「目玉」となる漆喰を丸めたものやビー玉をつければ完成だ。「ものづくりは、規格に合わせて製造する技術を要求されることが多いんですが、漆喰シーサーは元来即興で作られたものですから、

そもそも“規格外”なんです。子どもたちは伸び伸びと、自由に楽しんでくれていますね。面白いもので、シーサーというのは作った人に似るんです。体験を終えた子どもたちにそのことを伝えると盛り上がるんですよ（笑）。シーサーを作ると『実際の動物はどんな姿をしていたかな？』ということも改めて考えるようになり、観察力も養われるのではないのでしょうか。最近はコンクリート住宅が増えていますが、沖縄独特の景観や文化、伝統を守るために琉球赤瓦の建物は欠かせません。こうした機会を通じて、子どもたちに伝統的な建築やものづくりの良さを感じてもらいたいですね」（同組合 田端忠副代表理事）。



沖縄生麺協同組合の「手打ち沖縄そば作り」は、おいしい
そうな出汁の香りで大人たちも惹きつけていた。この体験
では茹でるだけでなく、麺をこねて、伸ばして、切るとい
う工程もすべて子どもたちが行う。麺は透き通るほど薄く
伸ばさないと茹でた時に硬くなってしまいが、麺棒を使っ
て伸ばすには強い力が必要だ。大変な思いをして作った沖
縄そばの味は格別だったと見えて、作業を終えた参加者は
嬉しそうに麺をすすっていた。「おいしい麺を作るにはどの工程も疎かにできませんので、



丁寧に指導するようにしています。現代は食の多様化が進んで
いますが、子どもたちにはこの体験を通じて、伝統ある沖縄そ
ばを好きになってもらいたいですね。それに製麺業者ごと
に麺のコシや太さもそれぞれ
違いますから、これを機にい
ろいろなお店で味わってみて
くれると嬉しいです」(同組合
宮城實理事長)。



女兒らの人気を集めていたのは、沖縄県フラワー装飾
技能士会が提供する「ハロウィンのアレンジメント」。参
加者は小さな箱に造花を挿してアレンジメントを制作し
た。色の組み合わせや配置に気を配りながらデザインし
ていく点は、生花を使ったプロの仕事と変わらない。一
度体験すると楽しさに魅了されるらしく、昨年参加した



リピーターも多いという。「お
花というのは、人が生まれた時からこの世を去る時まで寄り添っ
てくれて、悲しみを半分に、喜びは2倍、3倍にしてくれるもの
です。参加されたお子さんには、自分の手でアレンジメントを
作る楽しさを知ってもらい、特別な日でない普通の日にも、お
花を楽しむようになってもらえればと思います。沖縄にはトロ
ピカルでカラフルなお花が多いので、そんな地域ならではの幸
せも感じてもらいたいですね」(同技能士会 上間睦子会長)。

この体験ブースの近くでは「第5回沖縄県フラワー装飾技能競技大会」の作品も展示された。今回は翌月（11月2～5日）に開催される「おきなわ技能五輪・アビリンピック2018」の周知のために、学生の部も開催。中部農林高校と南部農林高校の生徒らが技術とセンスを競った。学生の部・会員の部ともに、テーマは「ハッピーハロウィン」。来場者による人気投票コーナーも設けられており、展示終了後は来場者に抽選でプレゼントされた。



大きな「氷柱」から美しい「氷像」へ 調理師たちが魅せた“冷たく熱い闘い”



フェスタ内では「第32回沖縄県調理技能競技大会」も開催され、巨大アーチのある会場入り口付近で「氷彫刻部門（一本彫り）」が行われた。競技に参加したリゾートホテルに所属する調理師らはノコギリなどを駆使して、重量140kgという巨大な氷柱との格闘を繰り広げる。この日の最高気温は25℃近くに達したため、選手らは氷の溶け方にも気を配りながら、「エンゼルフィッシュ」などの見事な作品を生み出した。